

創世記21章8－12節 「イシュマエルの追放」

1A 御霊による実

1B 神の約束への信仰

2B 十字架による肉の死

3B 取るに足りないもの

2A 信仰と相いれない肉

1B 改善しない肉

2B 肉の弱さを担われたキリスト

3B 御霊との対比

3A 肉による迫害

1B カインの殺人

2B ユダヤ人による迫害

3B 光に照らされる闇

4A 断ち切る勇氣

1B 肢体を切る思い

2B 身内を捨てる思い

3B 主に任せる勇氣

本文

創世記 21 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは、19 章まで来ましたが、今日、午後
に 20-21 章を一節ずつ見ていきます。今朝は、21 章 8-10 節に注目します。「⁸その子は育って乳
離れした。アブラハムはイサクの乳離れの日に、盛大な宴会を催した。⁹サラは、エジプトの女ハガ
ルがアブラハムに産んだ子が、イサクをからかっているのを見た。¹⁰それで、アブラハムに言った。
「この女奴隷とその子を追い出してください。この女奴隷の子は、私の子イサクとともに跡取りにな
るべきではないのですから。」¹¹ このことで、アブラハムは非常に苦しんだ。それが自分の子に関
わることだったからである。¹² 神はアブラハムに仰せられた。「その少年とあなたの女奴隷のこ
とで苦しんではならない。サラがあなたに言うことはみな、言うとおりに聞き入れなさい。というのは、
イサクにあって、あなたの子孫が起こされるからだ。」

ついに、イサクが生まれました。主がサラから男の子が生まれると約束されて、その通りになり
ました。実にアブラハムが百歳、サラが九十歳の時の子です。そして、この子が乳離れしました。
それで盛大な宴会を開いています。ところが、兄イシュマエルが、彼をからかっていました。それ
を見て、サラが、ハガルとイシュマエルを追い出してください。彼らが跡取りになるべきではない、と
訴えます。続きを見ると、主はアブラハムにその通りだから、出て行かせなさいと命じられます。

1A 御霊による実

私たちはずっと、アブラハムの生涯は、信仰の生涯であることを学んでいます。彼から子が生まれ、大いなる国民となるという約束を与えられ、それを信じました。そして、その約束を実現する力を神は持っておられることも信じていました。それで、事実、約束の子が生まれます。これを言いかえるならば、御霊の実であると言えます。神の霊が、そのいのちによって実を結ばせ、それが残るようにされます。

それに対して、自分たちの努力で子を生み、それで約束がかなえられたとしたのが、ハガルによる子イシュマエルです。自分たちがこのことを成し遂げなければいけないとする、肉の努力です。そして、この肉の力が、神の御霊の働きに真っ向から対立し、相いれないので、どちらかで生きるしかないのだということが、今朝のお話です。

以前、イスラエルに旅行に行った時にベツレヘムに行きました。パレスチナ人のガイドが、イエスを主と信じる、新生したクリスチャンでした。御霊によって新たに生まれる体験をした人です。彼が言うには、自分に反対するのは、ムスリムの隣人ではないということです。反対して、迫害するのは、実は、同じキリスト教徒の家族や親族なのだそうです。パレスチナのアラブ人には、主に伝統的にギリシア正教に属しているキリスト教徒がいます。彼らは伝統によって、自分たちをキリスト教徒だと言います。けれども、本当にイエスを信じた人が現れるとそこで反対するのです。これが、肉の人と御霊の人の対比です。反対は、外側からではなく、内側から来るのだということです。

1B 神の約束への信仰

神は、ご自分の霊を注がれる約束をされました。イスラエルの民には、律法が与えられましたが、その契約に違反します。それで主が、律法を一人一人の心に中に入れて、それで主に聞き従うようにされます。それがエレミヤが預言した、新しい契約です。その心の中に律法を入れるというのが、御霊の働きです。そして、石のように固い心を、肉のように柔らかい心にするために、ご自身の御霊を注ぐとの約束を、主はエゼキエルを通して、してくださいました。

ですから、主を信じ、この方の言われることを信じて聞き従う時に、御霊が働かれます。パウロが、ガラテヤ人に言いました。「ガラ 3:1-2 ああ、愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、目の前に描き出されたというのに、だれがあなたがたを惑わしたのですか。2 これだけは、あなたがたに聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。」信仰によって、御霊が注がれるのです。

2B 十字架による肉の死

そして、私たちの肉については、どうなっているのでしょうか？パウロは、律法によって生きてきた人生について、その私は十字架につけられたと言いました。「ガラ 2:19-20 しかし私は、神に生

きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。20 もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。」

自分は、十字架につけられているのです。自分は死んでいるのです。けれども、その自分が今も生きているのは、あくまでも、よみがえられたキリストが内に住んでおられることを信じて、生きています。自分がキリストの死にあって死んでいるとみなしているところに、生きておられるキリストが私の内に生きておられるのです。

3B 取るに足りないもの

自分が回心する前に、持っていたものが、キリストを知ったすばらしさのゆえに、何でもないものになったと告白したのが、使徒パウロです。もし彼が何かを誇るとしたら、いくらでも利点がありました。彼のことが直接、聞いてみましょう。「ピリ 3:4-6 ただし、私には、肉においても頼れるところがあります。ほかのだれかが肉に頼れると思うなら、私はそれ以上です。5 私は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエル民族、ベニヤミン部族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法についてはパリサイ人、6 その熱心については教会を迫害したほどであり、律法による義については非難されるところがない者でした。」

彼は、生粋のユダヤ人だというだけでなく、律法を極めて守る熱心なパリサイ派の人でした。誇るべきことがあるといたら、彼を差し置いて誰がいるのか？ということです。ところが、彼はこう続けて言うのです。「3:7-8 しかし私は、自分にとって得であったこのようなすべてのものを、キリストのゆえに損と思うようになりました。8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損と思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくと考えています。」彼にとって得だと思われるものが、すべて損になったということです。さらに、これらをちりあくと、はっきり言うと「糞尿」だと言っているのです！

ここまで、はっきりしているのです！例えば、ここに、ホームレスの兄弟がいるとしましょう。そして、今、大成功している事業を展開している人がここにいますとしましょう。しかし、キリストにあっては、全く一つなのです！その大成功している事業を、キリストにある神の栄光のところに持ってくれば、激しく異臭を放つ排泄物に等しくなります。そこには、すべての罪を赦し、きよめてくださったキリストの血潮による、麗しい神の恵みの栄光だけが輝いています。

2A 信仰と相いれない肉

1B 改善しない肉

ですから、私たちはキリストに生きていただき、自分は死んでいるという立場を取り続ける必要

があります。パウロはまた、律法による義によって、とてつもない葛藤を覚えた体験を告白しています。ロマ 7 章にあります。彼は、律法については非の打ちどころがない者とまで言いました。けれども、キリストに出会い、イエスの教えは、形だけの律法ではなく、その律法の示している神の聖さ、正しさに触れたのです。それは、形や、肉においての義ではなく、霊的なもの、心のうちに置ける姿勢までを探るものであることを知ったのです。「7:14-15 私たちは、律法が霊的なものであることを知っています。しかし、私は肉的な者であり、売り渡されて罪の下にある者です。15 私には、自分のしていることが分かりません。自分がしたいと願うことはせずに、むしろ自分が憎んでいることを行っているからです。」

例えば、イエスは、こう言われました。「マタ 5:21-22 昔の人々に対して、『殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。22 しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に対して怒る者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に『ばか者』と言う者は最高法院でさばかれます。『愚か者』と言う者は火の燃えるゲヘナに投げ込まれます。」人殺しはしていないけれども、自分の気に入らない人がいたら、いなくなってしまうばいいのにと思っていたら、殺人を犯しているのだと、主は言われるのです。

そういった尺度から、律法にしたがって善を行おうとしても、かえって悪を行っている自分自身に気づくのだとパウロは言いました。律法を行おうとすればするほど、それに違反しているようなことをしているのだと気づきます。パウロは律法に熱心で、キリスト者が死ぬことに同意している、つまり殺人の罪を犯しました。また、自分自身が律法を守っていればそれだけ、「私は律法を守っている」として誇り、自慢するわけですが、それは、主が最も忌み嫌われる高慢の罪です。どうやっても、自分の義を立てようすると、自分自身ががんにがらめになってしまうのです。

ですから、肉は改善できないことを知るので。パウロはロマ 7 章で、「7:24 私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」と嘆きます。自分は、「死のからだ」を持っていると言っているのです。肉は生きていますが、どんなに良くしようとしても悪いことをしてしまうので、死んでいると言っています。

2B 肉の弱さを担われたキリスト

けれども、そのすぐ次に、なんと神に感謝しているのです。「7:25 私たちの主イエス・キリストを通して、神に感謝します。こうして、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」そう、イエス・キリストにあって感謝しています。なぜなら、神は、この肉の弱さのために御子を送ってくださったことを教えているからです。「ロマ 8:3 肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。」私たちが、肉の弱さで打ちひしがれている時、思い出してください。主も同じ身体を持ってくださり、その身体において、罪の処罰

を受けてくださいました。だから、この肉の弱さによって、罪に定められることがないことを、はっきりと知るのです。

3B 御霊との対比

そうです、また十字架に戻るのです。私たちは罪赦されたから、今度こそ自分で頑張ろう！とはならないのです。十字架から卒業することは、ありません。どんなことがあっても、キリストが十字架で、私たちの負債を担われたことを知って、それを信じる時に、御霊が働かれます。「8:4 それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるためなのです。」律法の要求は、キリストが罪のために死なれたことによって満たされているので、そのキリストが私たちの内におられるので、肉の弱さについては、すべて処理済みなのです。

そこで、御霊が働かれます。十字架のみわざによる神の恵みを知った者に、御霊が働かれます。肉に思いとは全く対照的です。「8:5-8 肉に従う者は肉に属することを考えますが、御霊に従う者は御霊に属することを考えます。6 肉の思いは死ですが、御霊の思いはいのちと平安です。7 なぜなら、肉の思いは神に敵対するからです。それは神の律法に従いません。いや、従うことができないのです。8 肉のうちにある者は神を喜ばせることができません。」

私たちキリスト者は、「思い」という戦場を持っています。キリスト者であっても、いや、キリスト者だからこそ、これまでの肉の思いを、強く意識せざるを得ないのです。これまでは、当たり前抱いていた肉の思い、それらが死をもたらすことを知ってしまったからです。しかし、信仰が与えられてから、不思議に上から賜物のように与えられた、いのちと平安があります。その、いのちと平安の思いに、つまり御霊の思いに自分を従わせます。自分自身に、いくら肉の思いがあっても、それらは宙ぶらりんにしておいて、御霊に自分の思いを合わせるのです。

しばしば、キリスト者の中に、肉の思いが自分にあることを知って、絶望する人たちがいます。こんなひどいことを思ってしまった、キリスト者として失格だ！と。いいえ、肉の思いから解放されるのは、この肉のからだが変わえられる時、栄光のからだを与えられる時です。それはイエスが再び来られて、私たちを一瞬にして変えられる時であります。それまでは、うめいています。そうではなく、今は、そのような思いがあるのは当たり前なのです、しかし、その思いはスルーさせて、今、与えられている御霊の思いに自分を従わせるのです。

そうすると、不思議に、自分がいくらもがいても抜け出すことのできなかった肉の思いを、自然に殺すことができます。「8:13 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬことになります。しかし、もし御霊によってからだの行いを殺すなら、あなたがたは生きています。」なんとすばらしいことでしょうか！これまで、こんな奴は死んでしまえという憎しみがあつたとしても、御霊の思いが不思議に与えられていて、キリストの恵みに触れていると、その思いを選び取りたくなるのです。そして、選ぶ

と、その思いに満たされます。御霊に満たされるとは、こういうことです。

3A 肉による迫害

1B カインの殺人

このように、御霊と肉は相いれないものです。対立するものです。ですから、同じ仲間だと思ったのに、信仰によって踏み出す人は、肉のままの人によって迫害されます。それは、自分が罪深いことが、その信仰者によって明らかにされるからです。その第一人者が、カインでした。彼が、自分の献げた作物は受け入れられず、弟アベルの献げた子羊が受け入れられました。それで、カインの心には怒りと妬みが湧き出して、それでアベルを殺しました。彼は良い人だったのに、殺人者になったのではありません。その肉に、元々、人の血を流す欲望があって、それが信仰の人によって明らかにされてしまったからです。

2B ユダヤ人による迫害

そして、イスラエルの民によっても、それが明らかになりました。イスラエルの民は神が選ばれましたが、その一人一人も、神に応答して、信仰によって生きないといけません。ところが、自分が肉においてイスラエル人だからと居座っている人が、神に立ち返って生きる仲間のイスラエル人を迫害していったのです。数々の預言者が、同じイスラエルの王たちや偽預言者たちから迫害されたのは、そのためです。イエスご自身が、当時のユダヤ人指導者によって迫害され、殺されたのはそのためです。(マタ 23:34-35 参照)

3B 光に照らされる闇

神の恵みによって、信仰によって生きる人は、光になっています。キリストの光です。それで、闇がある人は、その闇が光によって明るみに出るので、それで迫害するのです。「ヨハ 3:20-21 悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。21 しかし、真理を行う者は、その行いが神にあってなされたことが明らかになるように、光の方に来る。」これが、イシュマエルがイサクをからかった理由です。自分が約束に属しないことを、約束の子によって明らかにされているので、からかいました。

4A 断ち切る勇気

そしてアブラハムは、とても苦しい思いをします。イシュマエルも彼の子です。けれども、主は、サラの言っている通りであると言われます。約束の子と、肉の子をいっしょに跡継ぎにはできないのです。肉の子は、神の家から離れなければいけないのです。

1B 肢体を切る思い

それが、キリストに従う時の決断と言ってよいでしょう。それは身を切る決断になることがあります。イエスのことばには、過激に聞こえるものが出てきます。例えば、女を情欲で見る者は、姦淫

を犯しており、ゲヘナに投げ込まれると言われます。「マタ 5:29 もし右の目があなたをつまづかせ
るなら、えぐり出して捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに投げ込まれないほう
がよいのです。」

これは、ユダヤ人の言い方で、わざと極端なことと言って、分かりやすくするための手法です。なぜ
なら、たとえ右の目をえぐり出しても、左の目で見ることができますから。オリゲネスという初代教
会の指導者は、情欲を断ち切るために去勢しました。なんと、それでも自分の思いの中での情欲
は消えなかったのです。そうです、御霊によって示されたことによって、初めて、肉の行いを殺すこ
とができるのです。その時、肉のつながりで手放さないものを手放す勇気が必要です。

2B 身内を捨てる思い

そして、自分に近い人たちのことが気になって、キリストの言われることに従えない人がいるか
もしれません。アブラハムがイシュマエルとの関係を切るのが難しかったように、難しいかもしれま
せん。そういった人々に、イエスは言われました。「ルカ 14:26 わたしのもとに来て、自分の父、
母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはでき
ません。」これもまた、そのまま憎むということではないのです。自分に近い人々の目が気になっ
て、主から言われていることを行えていないということ、それを強く退けるということです。

3B 主に任せる勇気

そして、そうした他の人たちのことは、任せる、明け渡す必要があります。自分で何とかしなけれ
ばいけないと思わなくてよいのです。「ルカ 9:59-60 イエスは別の人に、「わたしに従って来なさい」
と言われた。しかし、その人は言った。「まず行って、父を葬ることをお許しください。」60 イエスは
彼に言われた。「死人たちに、彼ら自身の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国
を言い広めなさい。」これは、たった今、父が死んだばかりで葬儀をしているのではなく、父が死
んでから、それからあなたに従います、と言っている人です。日本の人に、家族のことを思って良く
ある例ですね。

けれどもイエスは、「死人たちに、彼ら自身の死人たちを葬らせなさい」と言われます。この死人
たちというのは、霊的に死んでいる人々、不信者のことです。葬ることについてとか、家を引き継ぐ
ことであるとかは、信仰を持っていない人たちが気にする世界だから、その人たちに任せて、自分
自身は神の国の福音を言い広めなさいと言われているのです。任せていくということです。主に任
せ、そして他の人々に任せて、私たちに与えられた使命に集中するということです。

アブラハムがイシュマエルを去らせたように、私たちも去らせるべきもの、去らせるべき人がいる
でしょう。その人たちを自分たちで何とかできるように、明け渡します。そうして、主の約束のみに
集中します。